

オンライン脱抑制:構成概念の再考と新しい測定尺度作成の試み

温 若寒

本研究は、Suler (2004) によるオンライン脱抑制理論を基に、心理学研究におけるオンライン脱抑制の構成概念の適切な捉え方を検討し(研究 1)、それを網羅的に測定できる項目を作成し(研究 2)、さらに精緻化した多次元オンライン脱抑制尺度を作成することを目的とした。

人はオンライン環境では、現実社会でしないような行動をしてしまうという現象がよく指摘されている。この現象を説明するオンライン脱抑制理論(Suler, 2004)は、インターネットの普及と共に学際的に大きく存在感を発揮してきている。しかし、これまでの先行研究では、オンライン脱抑制の構成概念が明確に定義されておらず、構成概念の混乱を招いている。また、構成概念の不明確さにより、オンライン脱抑制を測定する尺度の開発も難しい。これまでオンライン脱抑制の測定を試みた複数の研究があるが(e.g. Cheung, Wong, & Chan, 2021; Udris, 2014; Stuart & Scott, 2021)、それらが心理学研究に適用しうるかどうかについてはまだ検討する余地が残されている。そこで本研究は、心理学の立場から改めてオンライン脱抑制の構成概念を再考し、それを測定できる心理尺度の作成を目指した。

研究 1 では、心理学の立場からオンライン脱抑制現象のプロセスを 3 つの視点(A~C)でまとめ、各視点の実証的研究を踏まえてそれぞれの特徴と意義を論じた。そして、視点 A では CMC の特徴とオンライン脱抑制の関係が無視されること、視点 C では心理学研究で検討できるターゲットの範囲が非常に狭くなることが、将来の研究にとって問題になる恐れがあることを指摘し、心理学研究でこうした問題が生じない視点 B に注目すべきという結論を導出した。

研究 2 では、視点 B に基づくオンライン脱抑制の定義を基に、オンライン脱抑制を測定できる項目を作成し、最終版尺度を作成するための予備尺度を構成した。ネット利用者 20 名を対象とする半構造化インタビューを行い、オンライン脱抑制に関わる経験を詳細に聴取した。先行研究を参考にしながら、オンライン脱抑制を 8 つのカテゴリーに分け、内容分析を行った。カテゴリーごとにオンライン脱抑制を測定できる項目を検討し、合計 73 項目を作成した。2 回の予備調査を経て、項目の修正を行いつつ、25 項目のオンライン脱抑制予備尺度を完成させた。

研究 3 では、研究 2 で作成した予備尺度を使用して、さらに洗練された尺度の作成を目指した。3 回の調査を経て、構造 A(4 因子 15 項目)と構造 B(3 因子 12 項目)の因子構造を得たが、項目の構成概念や因子構造の指標から総合的に判断し、構造 B を最終版尺度とした。各因子が表示する意味を勘案して、順に「現実モードの低下」、「疎遠さ認知の低下」、「つながり認知の低下」と命名した。尺度得点と因子得点は先行研究の重要な 2 尺度—Stuart & Scott (2021) による MOD と Udris (2016) による ODS—と有意な相関を持つことが示された。よって、十分な基準関連妥当性を持つ尺度が作成できたと考えられる。(社会心理学)